



NEWSLETTER

保育・子育て総合研究機構だより

2011.9.1発行 NO.20

公益社団法人全国私立保育園連盟 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会

実践

保育における学びの物語を通した子ども観の再考

…『さかな』をめぐる学びの物語』から

子どもは、何も知らない「白紙」のような存在なの
でしょうか？大人が子どもに対してさまざまなことを
教えなければ、子どもは学び、知ることができないの
でしょうか？それとも逆に、子どもは生活の中でさま
ざまなことを自ら学び、知り、わからないことや不
思議に感じたことを自ら学ぼうとする力を持つ、有能で
力強い存在なののでしょうか？子どもという存在をどう
見て、その姿をどうとらえていくのか、それこそ、制
度上のさまざまな変化が起きている今、子ども観につ
いて改めて保育に携わる者一人ひとりが再考し、子
どもの具体的な姿を取りあげ、語り合わなければなら
ないときが来ていると思います。そこで本稿では、私
たち保育園での学びの物語の一部を取りあげ、その中
のある一人の子どもの姿から気づき、子どもという存
在について改めて考えたことを述べたいと思います。

毎年7月になると、清水港の魚市場主催の「お魚の
絵のコンクール」が行われ、5歳児の子どもたちが毎
回作品を出品します（少し私たちの園について補足を
すると、散歩で出かけることができる距離に港と魚市
場があり、マグロなどの刺身が一般的に食卓に出るよ
うな、子どもたちの身近な食材として魚があるという、
静岡県の清水という地域に私たちの園があります）。

今年度は、担任が「絵を描く前に、子どもたちが『さ
かな』についてどんなイメージを持っているのか、どん
なことを知っているのか、グループごと（5～7名）
に語り合い、それをもとに、魚を見に出かけてみたい」
という思いを持ち、まずは、『さかな』について語り合
いました。「知ってる！おれっち（ぼくの家）の近くに、
魚屋さんがあるよ」「水族館に行けばいい」「沖縄に行
けば見れるよ」など、それぞれのグループで『さかな』
の話題はさまざまな広がりを見せ、グループごとに
違った『さかな』をめぐる学びの物語がはじまりました
（あるグループでは、魚屋だと思っていた店が、
行ってみたらお肉屋だった！なんてことも…）。

中でも、あるグループでは『さかな』から『港』へ
と子どもたちの関心が広がり、「知ってるよ。私（M
ちゃん）のお父さんは漁師だから、船があるよ」「それ
じゃ、Mちゃんのお父さんの船がある港へ行ってみよ
うよ」と、近くの港へ出かけることとなりました。

このグループの中心となったMちゃんはこれまで自
分の思いを友だちに伝えることが苦手で、仲間を引
張って何か行動をするということは見受けられませ
んでした。しかしこのときは、「Mが港までの行く道
を知っているからついてきて！」と先頭に立って道順を
ナビゲートし、「お父さんの船はあっちにあるから」と
船の停泊している場所まで行き（このときはちょうど
船のペンキの塗り替えで、Mちゃんのお父さんとお母
さんがいらっしゃいました）、修理中の船にも乗せて
もらうこともできました。園に帰ってきてからも、
「Mっち（私の家）の船に乗れて、楽しかったでしょ
う」と同じグループの子どもたちと話していました。

こうした彼女の普段とは違う力強い、いきいきとし
た姿に、担任だけでなく、保育者一同が驚きました。
Mちゃんは、お家の方の仕事をする姿を通して、港へ
の行き方や船の場所、獲れる魚のことなど、保育者も
知らないたくさんのことを学び、知っていたのです。
このような姿から、子どもは、何も知らない、わから
ない存在ではなく、自らの生活の中で学び、たくさん
のことを知っている力強い存在なのではないかとい
うことに改めて気づきました。ここで取りあげた学びの
物語の中ではMちゃんが主人公でしたが、それこそ
他の子どもたちもそれぞれの生活の中で学び、保育者
が知ること以上にたくさんを知り、また違う学び
の物語の中で、それぞれが主人公として生きている力
強い存在であると思うのです。

この『さかな』をめぐる学びの物語のきっかけは、
保育者の思いからでしたが、子どもたちの何気ないつ
ぶやきの中から、興味を持って遊ぶ姿から、子ども

ちそれぞれの学びの物語がはじまると思います。

そんな学びの物語を通して、子どもたちの力強い姿

に出会い、子ども観を再考してみませんか？

(井出孝太郎●静岡・えじり保育園主任保育士)

レポート 諸外国の保育と対話しよう 一届け 私たちの希望と平和を願う声！…米国の子どもたちから

★痛みと悲しみを分かち合う

「日本に大地震・Tsunami発生」のニュースはまたたく間に全世界に伝わりました。発生直後より世界各地から全私保連も団体会員の OMEP（世界幼児教育機構）日本委員会へ「子どもたちは大丈夫？」「保育施設は？」「何かできることは？」の声が届いています。

ここでは、とくに米国の教育現場や文化施設におけるアクション（行動）を報告します。

★千羽鶴プロジェクト

…ニューヨークのブルースクール(Blue School)

「ブルースクールコミュニティは、3月11日の地震と津波に心を痛めました。3年Cクラスの保護者の陣頭により、日本の伝説に由来した希望と平和のシンボルである鶴を折る千羽鶴プロジェクトを開始しました。鶴に希望と平和を託しましょう。(本校に在籍していた Kokoro さんの小学校に送ります)」

(千羽鶴プロジェクトの意図)

2歳9か月から小学3年生が在籍する私立ブルース

クール。子ども・保護者・教師が学びの主人公の「コミュニティスクール」としてニューヨーク市マンハッタンに2年前開校しました。学校の名称は、「音楽・芸術・コメディ」三位一体、全身ブルー（青）一色でパフォーマンスを展開するブルーマングループに由来します。日本人プロデューサーに見出されて全世界で注目を浴び、東京で現在公演中です。教育理念に「表現体と世界市民としての子ども・創造性に満ち溢れ学びの喜びを分かち合うコミュニティとしての学校」を挙げています。教育理念が千羽鶴プロジェクトに反映していることが読みとれます。

千羽鶴プロジェクトは、誰もが参加するプロジェクトです。「『希望と平和』を願う子ども・保護者・教師の声を被災者に届けたい！との思いです」とカリキュラムディレクターの David 先生は語りました。

★ Wish Tree（希望の木）プロジェクト

…ボストン子ども博物館

「多くの国では、紙にお願いごとを書いて木に置く

こころ
の
風景

2

「おおかみ しんだ」コール

N子はお昼寝の寝付きが悪く、保育者はいつも手を焼いています。みんなが寝てから1時間も過ぎないと寝ないし、寝ないで終わってしまう日もあります。でもまだ2歳児なのでなんとか寝かせたい、その思いが大きくなると、かえってN子の気持ちをハイにさせてしまうこともあり、ちょっと悩みのタネでした。

お昼寝の前はいつも絵本や素話をしてもらうのが日課です。お話の後は、保育者が歌う素敵な子守唄を聞きながら寝るのですが…。秋のある日のこと、この日はベテラン保育士も傍について「おおかみと7ひきのこやぎ」の話を聞いて寝ることになりました。他の子

たちは寝入ったのに、N子は今日も寝られずに、時々静かにするように促されます。しかし、なかなか治まらないので少々強引に布団に寝かせられました。

すると、N子が「おおかみ しんだ」といい出すのです。保育者は目で静かにするように合図したり、「シーッ」と指で合図したりするのですが治まりません。あげくのはてには動き出し、保育者は布団に連れ戻す…。そんなやりとりを何度かする間も、「おおかみしんだ」を繰り返すN子です。保育者の「寝ようね」の声掛けに応えようとしなくて「おおかみしんだ おおかみしんだ おおかみしんだ おおかみしんだ おおかみしんだ おおかみしんだ

りつけます。この木は『希望の木』と呼ばれています。今回、日本人学生さんがパズルのような木を作成してくれました。あなたの前向きで心あたたかく活力あるメッセージを1枚の紙に寄せて、日本の方たちに送riませんか?」(「Wish Tree」の趣旨説明文)

米国東部、マサチューセッツ州ボストンにあるボストン子ども博物館は、「実体験」型として世界的に有名です。京都市と姉妹都市のボストン、館内には日本の家庭生活を疑似体験できる「京の家」があります(どうみても1970年代あたりの生活ですが)。その入口に震災後すぐ「希望の木」が置かれました。メッセージの中には、

- ・日本、大丈夫だよ(アレッサンドラ)
- ・また家を建て直せますように(ジェイソン)
- ・愛しているよ
- ・家が失われませんように(キャサリン)
- ・テレビのビデオで観て泣いちゃったけれど、日本はもっとよくなると思うよ(クイン)
- ・お小遣い寄付するからね
- ・魚が救われますように
- ・水と食べ物がありますように
- ・寄付金送るからね、そうすればよい暮らしになるよなど、多くの子どもたちから日本の被災した子どもたちに「応援しているよ」、声が届け!とメッセージが寄せられていました。



ブルースクールの千羽鶴プロジェクト

★“Think globally, Act locally! —地球規模で考え、足元から実行しよう!”を保育園から

誌面の関係上、ほんの一部の紹介です。ショッピングモールや教会をはじめ、さまざまところで日本や被災者の皆様のことや子どもたちのことに思いめぐらすと同時に、行動を起こしている姿がありました。

なぜ、この「ニューズレター」で報告?と思われたかもしれません。地球規模で情報や経済、環境が繋がっている今、各保育園の実践と世界のつながりを本研究機構でも企画し、遂行できればと思います。

世界の子どもたちも、日本の復興を信じ、応援しています!

(森 眞理●前 東洋英和幼稚園園長)



…」と止むことなく繰り返し、その異様な程の姿に大丈夫かな?と保育者も不安になってきたようでした。

だっこしてみたり、毛布をかけてみたりしてはみるものの、手立てが見つからなくなって焦りの気持ちが大きくなって、少々オロオロ気味になって保育者が思わずかけたのは、「おおかみ死んじゃったね」の一言。そうしたら「うん!」と言って治まったのです。

「フーッ!やられたあー」きょうだいをみんな呑みこんでしまうほどのこわいおおかみが、本当に死んだかどうか心配でたまらなくて、それを確かめたかったN子だったのでした。本当はそのことに気がついて共感してあげればよかったんだあー。「いつもこの子は寝ない子」「いつも大人のいうことを聞かない困った子」というような先入観でレッテルをはって見せようと、深みにはまってよけいな溝ができてしまい、修正不可能になってしまったのでした。

「学んだなあー」と、このことを皆に報告してくれた当の保育者です。(おもいこみが深みをつくる)

(鈴木眞廣●千葉・和光保育園園長)

*鈴木委員長の保育園で、ソニー幼児教育支援プログラム【公開保育・実践発表会】が10月21日(金)に開かれます!
http://www.sony-ef.or.jp/preschool/jissen/2011/guide_wako.html

子どもにとって、幼稚園とはどんなところでしょう。

幼稚園というところは、子どもが家庭から一歩踏み出し出会う、はじめての社会だと思えます。そこで子どもたちは何を体験し、何を身につけていくのか。幼稚園は、子どもたち一人ひとりが大好きな人・大好きなもの・大好きなことを見つけ、それらとの関係を育て深めるところでありたいと思っています。なぜならば、そのことがその後の人生の豊かさに通じることだと考えるからです。そのような意味で、幼稚園生活は、生きる力の源であるといえますが、その大切な営みを支えていくのが保育者の仕事であると思えます。

入園当初、母親と離れるのが嫌で泣いていた子どもが、次第に先生や友だちと会うのを楽しみに登園してくるようになります。これは、その子にとって大切な存在が家族を軸として先生、友だちと広がっている現れでしょう。人は人とかかわることにより成長していきますが、相手を理解しようとする気持ちや思いやり、やさしさ、許す気持ちなどは、自分にとって大切な存在との関係の中でこそ育まれるものだと思います。また、5歳児も後半になると、自分たちで協力しながらどんどん遊びを進めるようになります。しかし、そんな子どもたちが「本当に困ったときは先生がいる」と話しているのを聞いたとき、自分の力でやってみよう、挑戦してみようとする気持ちは、心の基地があればこそ生まれるもので、保育者との信頼関係によって支えられているのだと痛感しました。このような信頼関係は、ただ同じ場所で同じ時間を過ごすだけでは築くことができません。保育者が子ども一人ひとりの人格を尊んでかかわること、その子を理解したいと思い、努力をすること、その子のよさや成長を見つけて感動し一緒に喜び合うこと、保育者にとってその子が大切な存在であることをさまざまな場面で伝えていくこと等が必要なのではないでしょうか。それらを誠実にできる人が保育者としての専門性をもった人だと思うのです。

子どもにとって、ものとの出会いは自己実現していくためにとっても重要です。ものとかかわることで子どもはさまざまなことを感じたり、考えたりします。また自分の思いやイメージを表現するためにも物を使い、新たなものをつくり出していきます。偶然出会うもの

もありますが、園生活の中でいつ、どのようなものと、どのようにかかわっていくことが、その子の成長につながるのかを考え、環境を構成する力をもつことも保育者としての専門性だと考えます。そのためには、さまざまなものの特徴や魅力、可能性を理解するとともに、ものと子どもとの関係性を理解していく力が保育者には求められていると思えます。

幼児期に大好きなことと出会い、夢中になって取り組む楽しさや喜びを味わうことは、人として、そのときそのときの生きがいを見つけることにつながっていきます。子どもにとって、今このときの充実こそが明日の充実を生み出すと考えるとき、幼稚園が、そして保育者が、今、何を大切にしていかなければならないのかが見えてくるのではないのでしょうか。

(宮下友美恵●静岡・静岡豊田幼稚園園長)

編集後記

◎改めて「保育者の役割」について考えてみる

最近、「子どもの有能性」や「保育者の役割」を取りあげた「評論」や「実践報告」が増えています。鈴木委員長の「こころの風景」では「いつも大人のいうことを聞かない困った子」という先入観をなくし、「学んだなあー」と気づく保育者像が述べられ、井出委員の「さかなの物語」では「子どもは、何も知らない、わらない存在ではなく、自らの生活の中で学び、たくさんを知っている力強い存在なのではないか」と、「保育者の気づきの物語」が語られています。

宮下先生は、自分たちで協力しながら遊びを進めるとき「本当に困ったときは先生がいる」と子どもたちが話しているのを聞いて、「挑戦してみようとする気持ちは、保育者との信頼関係によって支えられているのだと痛感した」と述べられています。森委員からは「さまざまなことが地球規模でつながっている今、各保育園の実践と世界のつながりを本研究機構としても企画・遂行することができれば」と提案いただいています。私たちは世界の国々から「保育」を学ぼうとしますが、日本のすばらしい保育実践や保育者の姿をしっかりと国内で分かち合っ、世界に対して、誇りをもって発信すべきだとも思います。

(片山喜章●神戸市・なかはら保育園園長)

◆問合せ

公益社団法人全国私立保育園連盟
保育・子育て総合研究機構研究企画委員会
〒111-0051 東京都台東区蔵前4-11-10
TEL 03-3865-3880 / FAX 03-3865-3879
URL <http://www.zenshihoren.or.jp>
E-mail ans@zenshihoren.or.jp